

レインブーツ & スターリースカイ

齊藤脩 田村侑介 遠藤友咲 国松みなみ 笹木重聖 高山飛勇吾 鳩貝優太

担当教員：松原康介 TA：井尻俊介



1 背景と目的

『長ぐつと星空』。ふるさと文庫より刊行された、筑波研究学園都市の生活を記録する会編纂の文集の題名である。筑波研究学園都市建設以来、地域の住民自身によって飾り気のない、素朴な筆致で書かれた生活文集は大きな反響を呼んだ。

本の内容とは凡そ結び付きそうにない荒唐無稽な題名には深い意味がある。

建設間もない学園都市は道路が舗装されておらず、道は泥でぬかるみ、移動のために長ぐつは必須であった。一方、街には街灯が無く、太陽が沈めば辺りは闇に包まれ、夜空を見上げれば東京では決して見られない満天の星がきらめいていた。「長ぐつと星空」は筑波研究学園都市の住民にとって最も身近なものだった。



図 1 1960年の桜中学校通学路（『目で見つづける歴史』）

本書には、完成間もない学園都市に移住した人々の驚くべき日常が記されている。例えば、『住宅を一步

出た所から道はまだ舗装されておらず、長靴が必要』
『生ゴミは松林に掘った穴に埋めていた』『水道水は
いつでも濁っていた』『夜は月明り以外は懐中電灯が
頼り』という記述がある（『長ぐつと星空 第三部』）。
現在この地に暮らす我々には想像もつかないことで
ある。



図 2 1972 年の花室団地（『目で見るつくばの歴史』）

さらにはこのような記述もあった。

「（新設小学校に旧集落の子供を通わせることへの
反対運動について）これは村の人の、国や県の土地の
買上げ以来の被害者意識、新住民に対するコンプレ
ックスの表われとみてよいだろう。」（『続・長ぐつと
星空 下』 p289）

「旧住民は百年もここに住み、苦勞してきたのに、
新住民は来たばかりで、すぐにいろいろな要求をし
てくる」（『続・長ぐつと星空 上』 p48,49）

学園都市に移り住んだ「新住民」と、以前から周辺
の集落で暮らしてきた「旧住民」の対立。旧住民は筑
波研究学園都市の建設に対して疎外感を感じている
ような記述が見受けられたのだ。

『学園は、皆どこかの馬の骨か分からない』

『浮草みたいなものだから』

『博士はバカセよ』

（島美佐子「人間とコミュニケーション」より、『続・
長ぐつと星空 下』収録）

などと新住民を揶揄して言った。

そもそも筑波研究学園都市は首都東京への一極集

中是正と、研究・教育施設の集約を目的として 1961
年に建設が閣議決定された。これが「研究学園都市構
想」である。1963 年には 4 つの候補地の中から筑波
地域に筑波研究学園都市を建設することが閣議決定
された。

それ以前から、筑波地域には昭和 30 年代頃までに
筑波町、大穂町、豊里町、桜村、谷田部町、荃崎町の
6 か町村が形成され（図 3）、伝統的な農村集落が点
在していた。

しばしば筑波研究学園都市は「何もない場所に新都
市を作った」と語られるが、実際にはこの 6 か町村
には農村集落とそこに住まう人々、筑波地域の文化
が存在したのである。



図 3 つくば市合併以前の 6 か町村

筑波研究学園都市が目指した都市像は何だったの
か。新都市に住民たちは何を思ったのか。

それらを明らかにするために、私たちは筑波研究学
園都市誕生の影に隠された周辺住民たちの声なき声
を探る研究を始めた。

2 調査手法

2-1 文献調査

『長ぐつと星空』に加え、筑波研究学園都市に関す

るさまざまな文献や、動画資料などから建設にまつわる経緯、経過、住民たちの声を集め、当時の状況を知る手掛かりとした。（表 1）

表 1 調査に使用した文献の一部

文献情報	媒体	概要
筑波研究学園都市の生活を記録する会 (1981)「長ぐつと星空」(第一部・第二部・第三部)	書籍	筑波研究学園都市の建設当初・建設の過程が住民目線で書かれている。建設当時の生活・心境などが中心。
筑波研究学園都市の生活を記録する会 (1985)「続・長ぐつと星空」(上・中・下)	書籍	筑波研究学園都市の建設当初・建設の過程が住民目線で書かれている。「長ぐつと星空」の続編。
藤沢勲兵衛(1980)「勲翁自伝：八十五歳のうは言」	書籍	学園都市建設期に、栄村村長・桜村村長を務めた藤沢勲兵衛が85歳の時に記した自伝。
三井康壽(2015)「筑波研究学園都市論」	書籍	筑波研究学園都市の建設理念や田園都市構想、研究学園都市建設の進み方、それに対する筆者の評価。
「ACCSアーカイブ(研究学園都市今昔25年)」	動画	研究学園都市建設開始から25年間の都市の変化について。新住民のインタビューを話題の中心に進められている。
茨城県映画「未来をひらく都市－筑波研究学園都市－」(1981)	動画	住民の生活と研究機関、新旧住民の交流について。
土肥 博至, 若林 時郎(1988)「筑波研究学園都市における住民の生活と意識の変容について」	論文	筑波研究学園都市という新都市がどのような過程を経て現在に至っているのか、都市形成過程の実態についての考察。
桜井武雄(1987)「茨城県下における田園都市運動の実践報告」	論文	茨城県下における田園都市運動の実践報告
土肥博至, 筒井義富, 鎌田元弘(1988)「混住化農村集落における住宅団地計画に関する基礎的研究」	論文	集落内部における新旧住民の混在状況を「混在パターン」としてとらえ、それらの発現の状況を観察し、集落形態別に混在パターンからみた開発方式について考察している。

2-2 年表作成

文献調査の過程で、筑波研究学園都市に関する出来事をまとめた詳細な年表を作成し、筑波研究学園都市建設の歴史を把握した。（表 2、年表の全体は付録を参照）

本年表ではいくつかの文献で見受けられたように、筑波研究学園都市の建設を以下の三つの段階に分けた。

「建設期」（1963 年～1980 年） 筑波研究学園都市建設の閣議決定から当初予定されていた 43 機関の移転完了まで

「整備期」（1981 年～1987 年） 都市機能が整備されていった時期。つくば市発足までを指す。筑波科学万博開催をはじめ、様々な出来事が起こった。

「発展期」（1988 年～現在） つくば市発足以降、現在に至るまで。TX 開通などが含まれ、研究学園や周辺地域の発展がめざましい。

表 2 筑波研究学園都市関連年表（一部抜粋）

年月日	できごと
1963/9	筑波に研究学園都市の建設が閣議決定
1973/10	筑波大学開学
1980/3	43 機関の移転が完了（研究学園地区完成）
1983/6	つくばセンタービルとノバホール完成
1985/1	常磐道が東京と直結
1985/3	筑波科学万博（EXPO 85）開催
1987/4	筑波鉄道廃止
1987/11	つくば市発足
1988/1	筑波町がつくば市に編入
2005/8	つくばエクスプレス開業
2007/10	イーアスつくば開業
2008/3	イオンモールつくば開業

2-3 聞き取り調査

上記の 2 つの調査は文献を通して既存の研究、史料を収集、分析にあたるものであるが、本研究ではそれに加え、これまで記録化されてこなかった口述歴史（オーラル・ヒストリー）についても収集、分析の試みを行った。

筑波研究学園都市の建設以前からこの地域に住む人々や、学園都市建設を機に筑波に越してきた人々へのインタビューを行った。本調査では、つくば市内各地区を実際に歩き、調査に応じてくださった住民の方々に話を伺った。筑波研究学園都市建設による住民への影響や、建設に対する住民の思いを明らかにすることを目的として、主に以下の四項目を話題として調査を進めた。

- ①学園都市建設にあたっての心境の変化
- ②学園都市建設に伴っての地区の変化
- ③学園都市と地区の今に至るまでのつながり
- ④新旧住民の交流

この他にも、取材対象が思い浮かんだことを次々口にする対話形式で取材を進めた。

取材日程と取材地、実際に取材に応じてくださった方々を以下に示す。

表3 取材対象の一覧

11月3日 北条	
坂入英幸 様	北条街づくり振興会の会長。北条出身
武守ひろみ 様	北条街づくり振興会の会員。北条出身
11月29日 荻間、葛城	
高野裕美 様	昭和55年に移り住む
高野みつ 様	昭和42年に移り住む
12月2日 栗原	
男性	栗原で魚屋を営んでいた
女性たち	集団での対話形式で取材
12月2日 玉取、大曾根	
女性	80代の女性。農家
タカノタケオ 様（仮称）	郵便局と消防に勤めた経歴有
中島一治 様	中島砂利株式会社代表取締役
斎藤玲子 様	ポーラ・エスティン学園営業所職員
12月5日 上ノ室	
男性	1955年生まれ。農家
三谷利光 様	大豊商事代表取締役

3 調査結果

3-1 筑波研究学園都市の成立と反対運動

学園都市の建設以前は、現在のつくば市にあたる地域は、数々の農村集落が存在し、6つの町村に分かれていた。学園都市建設前から、この6か町村に住む旧住民は、まだ都市整備や開発が進んでいない農村

地域の「つくば」に新しい国家プロジェクトである学園都市ができることに期待もあったようだ。一方で、学園都市建設を機につくばに移転してくる新住民が多くいることや、既存の集落での生活が農地の買収によって失われてしまうのではないか、という不安を持つ声もあり、反対運動も起きた。

栄村、桜村村長を務めた藤沢勘兵衛は自伝にこう記している。

「研究学園都市反対運動はまたたく間に燃え上がり、谷田部町の小野川地区の小野崎集落からは代表が大学して桜村役場に押しかけてきました。百名以上いたでしょう。口々に桜村村長の私に、学園都市の建設に反対してほしい、と訴えるのでした。」（『勘翁自傳：八十五歳のうは言』）

3-2 錯綜する都市の理想

北条地区で住民インタビューを行った際に、『『均衡のとれた田園都市』というスローガンを聞いて、周辺と調和した都市ができると思っていた』という証言が得られた。他にも、「田園都市」という単語が住民たちの強い印象として残っていることを示唆する証言が得られた。

筑波研究学園都市と「田園都市」を結び付けた紹介は我々も耳にしたことがある。現在もTXみどりの駅周辺では「田園都市」と称した宅地開発が行われていることから、TX沿線全体に「田園都市」というイメージが広まっているように思われる。

しかし考え直してみると、研究学園都市構想そのものには「田園都市」という文言は無かった。実際、「田園都市」という文言が公式に現れるのは1970年の筑波研究学園都市建設法における『均衡のとれた田園都市』が初なのだが、ここに至るまでにどのような経緯があったのだろうか。

1961年に筑波研究学園都市の建設が閣議決定された。計画では、「機能上必ずしも東京都の既成市街地に置くことを要しない官庁」を集団移転するものと

した。加えて、研究施設を集約させて科学技術力の向上を目指した。これが、「研究学園都市」構想である。この構想においては、「田園都市」という文言は使われていない。

そもそも、「田園都市」という単語は1898年にイギリスの都市計画家、エベネザー・ハワードが著した『Garden Cities of To-morrow（邦題：明日の田園都市）』に端を発する。著書の中でハワードは都市と農村の利点を組み合わせた職住近接型の都市“Garden City”を提唱した。これが日本語の「田園都市」の語源である。

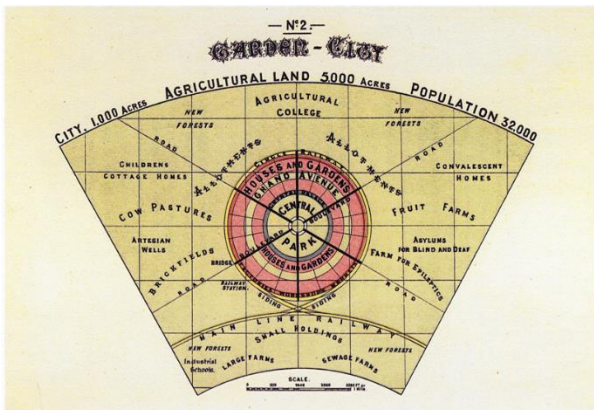


図4 田園都市のダイアグラム(E. ハワード『明日の田園都市』より)

ところで、よくよく考えてみると“Garden”を「田園」と訳すのは不適切ではないか。このことについては、“Garden City”を「田園都市」と訳したこと自体がある種の誤訳だと指摘がなされている。(村上,1999)

初めてハワードの著書を日本に持ち込んだのは横井時敬という農学博士だが、どういうわけか彼はこれを小説だと誤解したようである。その後内務省地方局有志編の『田園都市』が刊行され、ハワードの思想を紹介する。しかしこの書籍自体はハワードの訳本ではなく、農村地域の開発について述べた内容だった。したがって編者は“Garden”という単語を「庭、庭園」とは訳さず、より農村に関わりのある「田園」という単語を用いた。これがある種の誤訳であり、

「田園都市」についての誤解を招いた。

後には横井時敬が徳田秋声という作家と協力して『模範町村』という小説を著し、「田園都市」の思想を紹介する。

ハワードの“Garden City”に対して、日本の「田園都市」はより農村的な意味合いを持って広まったのだ。

1967年、茨城県は農村地域の生活環境改善を目指す「田園都市建設事業」という政策に取り組んでいた。これは農村地域のインフラ整備や、田園都市センター建設といった内容だった。無論、ハワードの“Garden City”論をなぞった政策ではない。

「田園都市」と名のつく事業について、政策決定の経緯について、発案者の一人である桜井武雄はこう記す。

「都市と農村の均衡のとれた生活環境の整備をめざす田園都市計画をたて、これを新しいむらづくり運動で実現しようではないかと呼びかけた」(桜井,1987)

やはり彼も「田園都市」という単語を内務省地方局有志編の『田園都市』の意味合いで捉えていたようである。

この田園都市建設事業は筑波地域でも行われた。

国の「研究学園都市」構想と県の「田園都市建設事業」、全く異なる二つの事業が同時にこの筑波地域で行われていようとは住民たちは思いもよらず、やがて二つの事業は混濁した。

藤沢勘兵衛は研究学園都市建設期の桜村で村長を務め、本事業において住民側の束ね役を担った人物である。また、彼は茨城県の田園都市建設事業に対しても強く共感していた。藤沢は自伝にこう記す。

「私は国の筑波研究学園都市の構想の本質も、(中略)日本に近代的なまったく新しい発想の田園都市を創るものだ、ととらえたのです」(『勘翁自傳：八十五歳のうは言』)



図 5 藤沢勤兵衛銅像

筑波研究学園都市の建設と田園都市建設事業、二つの事業を前にした藤沢は真っ先に「筑波研究学園都市は田園都市だ」と解釈した。彼を先頭に、この認識は住民たちの間に広まっていく。その後、藤沢は田園都市の視察としてハワードの思想が盛り込まれたイギリスのレッチワースを訪問している。本来の事業に“Garden City”論の要素はないことを知らず。

時を同じくして、学園都市のマスタープラン作成に携わった公団の都市計画家である土肥博至はマスタープランにハワードの田園都市の思想を取り入れる。藤沢はこれを見て「建設されるのは田園都市である」という認識を確たるものにしていく。

「私はこれ（筑波研究学園都市のマスタープラン）を見て、すぐ前年に視察していたイギリスのニュータウンと見比べてみました。（中略）本物の田園都市ができる、と思ったのです。」（前掲書）

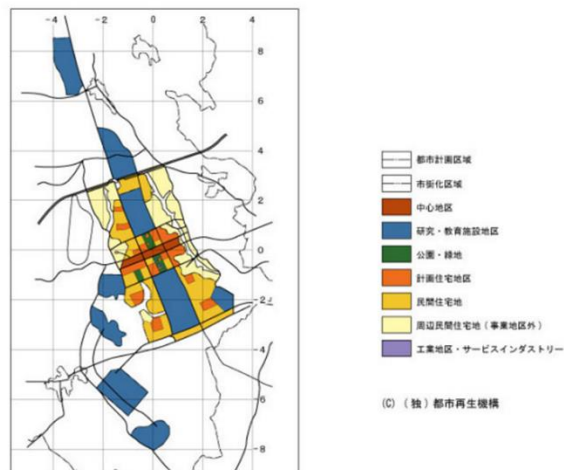


図 6 研究学園都市第二次マスタープラン（国土技術政策総合研究所『筑波研究学園都市の現状と諸課題にみる都市形成過程上の課題』より）

1970年に筑波研究学園都市建設法が成立し、「均衡のとれた田園都市」という文言が初めて取り入れられる。

住民たちは新都市に対して「現在の農村と調和した自然豊かな都市が作られる」と期待したのではない。「田園都市」という言葉にその希望をのせ、公式のスローガンになったことを喜んだのではないか。

また、筑波研究学園都市の建設が進むにつれ、「科学」「頭脳」「国際」「平和」といった単語が学園都市の枕詞として用いられるようになったことも、筑波研究学園都市という存在が様々な期待を背負われ、理想化していったことを象徴している。



図 7 日本住宅公団制作ビデオ『明日をみつめる国際頭脳都市』のタイトル

3-3 「田園都市」の現実

こうして学園都市が発展していく一方で、周辺地域は衰退していった。北条地区の住民は、「まちが開発から無視されている感覚を持った」、「周辺地域は発展に置いていかれた感覚がある」と語った（11月3日、北条地区においてヒアリング）。また、葛城地区の住民は「開発の対象でない地域との差が広がりさびれた地域と『都会化』した地域の差を感じることもあった」と語った（11月29日、葛城地区においてヒアリング）。学園都市に新しく越してきた人々も、予想と違う都市での生活に戸惑っていた。長ぐつと星空にはそんな住民の声が記されている。

「知性と科学の街、世界に誇る日本の研究学園都市ならば、図書館が建設されるのは時間の問題だと思っていたのです。あれから、もう八年経ちました。その間に次々と立派な施設が建設され、街はすっかり様変わりし、長靴も必要でなくなりましたが、依然、公共図書館はありません」（『続・長ぐつと星空 中』）

このように、開発段階の学園都市では都市機能が十分でなく、新住民の都市的な生活への期待は叶わなかった。

「田園都市」の言葉に託した住民たちの希望とは裏腹に、現実の研究学園都市はそれとかけ離れたものであった。

3-4 物理的な「分断」

学園都市周辺の住民へのインタビューでは、「学園都市ができたことで生活がかえって不便になった」という声が聞かれた（11月29日、荻間地区においてヒアリング）。これは、都市ができることで生活が豊かになるという自然な発想とは矛盾する。何が起こったのだろうか。

荻間集落の住民からは、「学園都市建設に伴う道路開発により、従来の『線』が寸断され、行き来がしにくくなった」という声を聞いた（11月29日、荻間地区においてヒアリング）。学園都市建設の前、荻間は

東西と南北を結ぶ道路が交わる場所で、大曾根、北条、谷田部などのさまざまな集落と直接行き来をすることができた。しかし、学園都市の建設に伴って、北、南、東に向かう道路は荻間集落の近くで学園都市内部に取り込まれ、消滅していった。かつての道をたどるには学園都市内の新道を使い、何度か右左折を繰り返さねばならない。このことが移動を妨げているようだ。

図8のピンクで示された道路が旧道、下図を見ると、研究学園都市の建設によって一部が消滅したことが分かる。

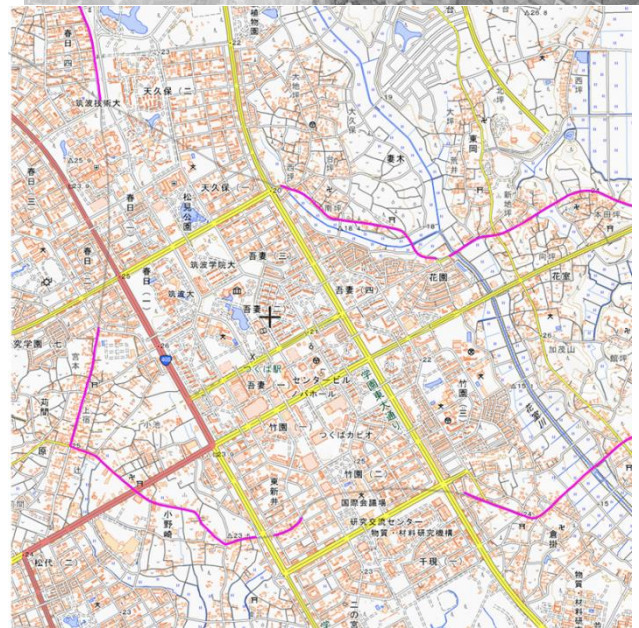
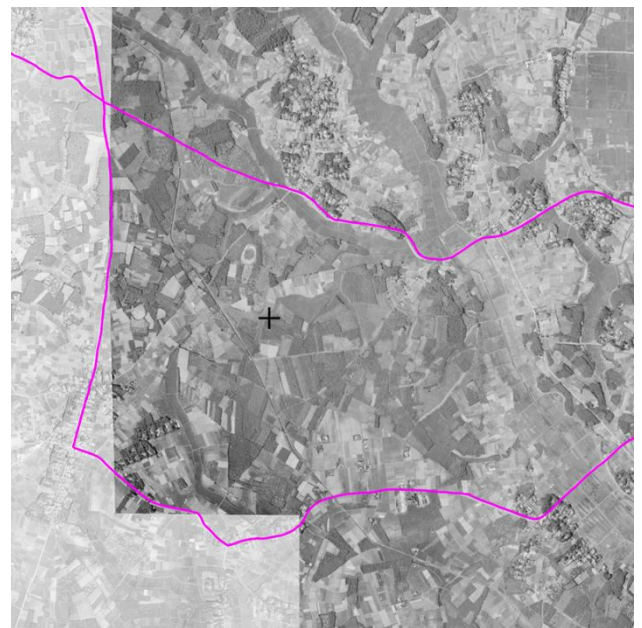


図8 1960年代の筑波地域航空写真(上)と現在の筑

波研究学園都市(下) (地理院地図をもとに加筆)

学園都市建設以前の筑波地域は、各集落とそれをつなぐ街道によって線で結ばれた経済圏が形成されていた。学園都市の建設に伴って建設された新道は、学園都市から土浦や牛久といった隣町への移動を容易にした一方、古くから学園都市周辺に位置した集落どうしの交流を妨げた。また、学園都市の建設によって車の移動に適した道路ばかりになり、徒歩での移動はかえって不便になったという声もあった。昔からの生活道路が新道によって分断されている箇所は数多く存在する。新道の建設が、かつてから存在した人々の移動の妨げになってしまったのだ。

図9は現在も荻間地区に立つ石碑である。現在はこの道をまっすぐ辿っても石碑にある集落にはたどり着けない。



図9 荻間の交差点に建つ石碑

3-5 心理的な「距離」

また旧住民と呼ばれる方々へのインタビューを通して、「学園」という言葉を幾度となく聞いた。彼らは筑波研究学園都市のことを「学園」と呼び、自身の

住む地域とは区別していた。そして栗原地区の方々へのインタビューでは、その多くが「学園建設はあまり関係がなかった」という感想を持っていた。筑波大学からわずか2 kmほどの場所に位置し、自身も大学へ働きに出ていたにも関わらず、である。

以下の文献からはそれまでの集落群の中に全く性質の異なるものが突如として流れ込んできた様子がうかがえる。

「茸とりに行ったり、兎を追ったりした山に、今は高層ビルが建ち並んでいる。ただの外人だって見なかったのに、この頃は外国の首相まで続々お出でになり、我々はこんな生活の変化に取り残されまいと必死だった。」（『続・長ぐつと星空 上』）

そしてその「自分たちとはかけ離れている」という感覚は、町のみならずそこに住む新住民に対してもあったようだ。

「しかし大部分の村民は、行政が新住民偏重になっているという意識が強く、『我々、インディアンは…』などと自虐的な物言いをする人も多い。」（『続・長ぐつと星空 下』）

そして新住民らとの言葉や文化の違いから、彼らとの交流に抵抗を感じていたことも分かった。

「住宅の人達とは言葉も違いますし、また出身地も様々なので、店の若い者は御用聞きに行くのを億劫がりました。」（『長ぐつと星空 第三部』）

「地元の子どもが話す茨城弁と違い、共通語が「どこことなく気取った風」であったため、転校してきた子どもの中には、言葉が交友を深めるのに障害となった人もいた。」（前掲書）

このような住民間の差異は、「学園」の人々を、ひいては筑波研究学園都市そのものを自分たちとは質の異なる別モノとして捉えることに繋がっていったのではないだろうか。

筑波研究学園都市は従来の地域構造を分断し、全く性質の異なるものを地域に持ち込んだ。筑波研究学園都市は集落の間に持ち込まれた巨大な異物であった。

3-6 新旧住民の交流

筑波嶺を外のみ見つつありかねて雪消の道をなづみ来るかも- 丹比真人國人（万葉集第三卷）

万葉集第三卷に載るこの詩は「筑波山を遠くから見ているだけでは飽き足りず、雪解けの道を苦しみながらやってきました。」という意味である。

東京の暮らしを離れ、学園都市に移り住んだ新住民たちは、生活に様々な不便を抱えつつも、この地を新たな故郷として馴染もうと努力していた。

我々は文献調査の中で新旧住民の確執と並んで彼らの交流の取り組みも見受けられた。

「泥のついたネギや大根を初めて見た子供達。近くの農家の人たちが採れたての野菜を朝市に運んでく光景はおなじみである。土浦まで野菜の買い出しに出かけ、途中の畑で白菜を分けてもらったことをきっかけに、農家へ遊びに行き、お茶をご馳走してもらい、採れた農作物を地元で売の話が出る。そして住宅街で野菜を並べる。最初は農家の人たちが声が出ず汗が出るばかり。そんな時に今度は新住民の人たちが冷たい麦茶を出す。こうして朝市が始まった。今では新旧住民を結ぶもの。」（茨城県映画『未来をひらく都市－筑波研究学園都市－』内ナレーション）



図 10 朝市での新旧住民の交流（茨城県映画『未来をひらく都市－筑波研究学園都市－』）

また、新住民が農作業や子豚の飼育を手伝っていたという記録もある。新旧住民の子供が通った九重、葛

城小学校では子供たちが大人よりも早く打ち解けていった事が記録されている。

地域住民へのインタビューでは、新住民と旧住民は互いに関心を持っていて断絶感はなく、まつりやPTAなどが自然と交流が生まれる場となっていたほか、筑波大学の教授が行う稽古・講座が住民たちの交流の機会になっていたという話もあった。

朝市での交流や、まつりやPTAの活動、さらには稽古や講座を通じた交流の中に、学園都市の住民を新たな仲間として受け入れようとする旧住民、そして筑波地域を新たなふるさととして、馴染もうとする新住民の努力をうかがうことができる。

4 考察

文献の調査を通じて我々は筑波研究学園都市の建設の経緯、それによる影響を様々な資料写真・映像と共に知ることができた。また、これまでの大学の授業では取り上げられてこなかった、住民たちの思いについても触れることができた。

そこから明らかになったのは、筑波研究学園都市は紆余曲折を経て建設がなされ、その段階では人々の様々な思惑が錯綜し、理想が肥大し、計画が当初の形から歪んでいったこと。それによって住民たちは期待が「裏切られた」ように感じることもあった。さらには研究学園都市の建設が地域社会の構造そのものをも大きく変えたという事実が明らかになった。こういった種々の変化に対して旧住民は生きにくさを感じ、新住民も戸惑いを覚えたのではないかと考察した。特に、旧住民の研究学園都市に対する煮え切らない思いの要因を、都市空間的な視点から明らかにできたことは大きい。

様々な困難を抱えた住民は一方で、それを乗り越えようという取り組みも盛んにおこなわれていたことが分かった。全く新しい都市にコミュニティはなく、住民は困惑した。それでも新たな活動を自分たちで興すことで交流を生み出した。こうした取り組みは現代では「まちづくり」という言葉で表されるが、当

時はこのような単語はそもそも存在しなかった。そのような意味では現代の「まちづくり」の原形とも言える先進的な活動だと評価できる。

建築家としてつくばセンタービルの設計も行った磯崎新は『建築のパフォーマンス』において筑波研究学園都市を概ね次のように評価している。

まったくの田園に突如として都市的な装いを出現させるべく計画されたから、この土地にまつわる一切の記憶は抹殺されている。都市と呼んでいいかわからないほど、都市の特性からほど遠く、私自身住みたくないと思った。(磯崎新『建築のパフォーマンス』)

彼が評価する通り、筑波研究学園都市は「都市を作り上げる」ということに拘り、「地域との調和」ひいては「そこに住む人々の暮らし」に考えが及んでいなかった、だから本研究で示したような問題を住民たちは抱えることになったのだ。

前世紀から活発に議論されてきた都市計画の理論は「機能的な都市を作る」「住みよい構造の街を作る」ことを主だった目的としていた。しかしその理論に従って建設された筑波研究学園都市の顛末を見れば、そこには欠けている視点があったことを認め、「人々が生きる都市を作る」という視点を加えねばならない。

他にも、今回は人文学的な視点を研究に取り入れ、住民たちの口述歴史(オーラルヒストリー)を収集することができたのは成果として大きい。

既に建設から半世紀以上が経過し、当時の状況を知る人々は少なくなりつつある。すべての知見が失われる前に、その中の僅かでも救い上げることができた。都市の記憶を数量的データや文献に限らず、住民たちの「言葉」という形態で残していく活動も今後はさらに活発化させていくべきだろう。

5 おわりに

調査を通じて我々は都市計画を行うことの難しさ、そして困難を乗り越え自分たちのまちを作り上げる

住民たちの尊い取り組みを知り、深く感じ入った。

ル・コルビュジェは住宅を「人が住むための機械」と称したが(『建築をめざして』)、建設されただけの都市もまた「人々が暮らすための機械」とも言える空虚な箱でしかないのかもしれない。そこに暮らす人々の「生」があって、初めて都市は完成する。

星空のように高く掲げられた都市の輝く理想に対して、現実という足元は重く冷たい泥でぬかるむ。それでも人々は長ぐつを履いて歩いていく。「長ぐつと星空」、それは筑波研究学園都市が辿った歴史の記憶、そのものである。

それは、とある本の題名であった。

それは、誕生間もないとある都市を象徴するものだった。

そしてそれは、とある都市が辿ってきた歴史を言い表す最良の言葉だった。

我々は彼らの営みに敬意を表して、本研究にその名を借りて題するものとする。

建設から半世紀以上の歳月を経た都市は今も、「まちをつくる」ことの本当の意味を我々に問いかけている。

参考文献

- [1] 筑波研究学園都市の生活を記録する会、『長ぐつと星空 第一部』,筑波書林,1981
- [2] 筑波研究学園都市の生活を記録する会、『長ぐつと星空 第二部』,筑波書林,1981
- [3] 筑波研究学園都市の生活を記録する会、『長ぐつと星空 第三部』,筑波書林,1981
- [4] 筑波研究学園都市の生活を記録する会、『続・長ぐつと星空上』,筑波書林,1985
- [5] 筑波研究学園都市の生活を記録する会、『続・長ぐつと星空中』,筑波書林,1985
- [6] 筑波研究学園都市の生活を記録する会、『続・長ぐつと星空下』,筑波書林,1985
- [7] 三井康壽、『筑波研究学園都市論』,鹿島出版会,2015
- [8] 久保田治夫、『筑波研究学園都市』,筑波書林,1981
- [9] 学園都市問題研究会、『筑波研究学園都市』,大月書店,1985
- [10] 早川公、『まちづくりのエスノグラフィ:《つくば》を織り合わせる人類学的実践』,春風社,2018

- [11] 安部奎輔,『藤沢勘兵衛と研究学園都市の概成』,STEP,1995
- [12] 堀口純子,『筑波研究学園都市における新旧住民のアクセント』,2011
- [13] NPO 法人つくば建築研究会,『つくば建築フォトファイル』,NPO 法人つくば建築研究会,2005
- [14] 筑波研究学園都市施設記録写真集刊行委員会,『写真集筑波研究学園都市:建築の記録』,日本建築学会,1982
- [15] 常陽新聞社企画室,『つくば 30 年 101 人の証言 つくば実験/情熱劇場』,1996
- [16] 藤沢勘兵衛,『勘翁自傳: 八十五歳のうは言』,勘翁自傳刊行委員会,1990,
- [17] 磯崎新,『建築のパフォーマンス: <つくばセンタービル>論争』,PARCO 出版局,1987
- [18] 饗庭伸,『平成都市計画史: 転換期の 30 年間が残したもの・受け継ぐもの』,花伝社,2021
- [19] "住宅都市整備公団,日本都市建築学会",『文化は都市を刺激する〈上〉』,プロセスアーキテクチュア,1995
- [20] "住宅都市整備公団,日本都市建築学会",『文化は都市を刺激する〈下〉』,プロセスアーキテクチュア,1996
- [21] 国土交通省,『筑波研究学園都市の歴史にみる都市づくりのあり方』, <https://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/iten/onlinelecture/lec128.html>,2021/12/17 閲覧
- [22] 一般財団法人総合科学研究機構,『目で見えるつくばの歴史』, <https://www.cross.or.jp/pdf/TsukubanoRekishi/Medemiru-Tsukubanougoki.pdf>,2021/12/17 閲覧
- [23] "土肥 博至, 若林 時郎",『筑波研究学園都市における住民の生活と意識の変容について』, https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalcpj/23/0/23_337/_article/-char/ja,2021/12/17 閲覧
- [24] 北条ふれあい館,『北条ふれあい館』, <http://www.tsukuba-hojo.jp/06fureaikan/index.html>,2021/12/17 閲覧
- [25] 国土技術政策総合研究所,『筑波研究学園都市の現状と諸課題にみる都市形成過程上の問題』, <http://www.nilim.go.jp/lab/bcg/siryu/tnn/tnn0815.htm>,2021/12/17 閲覧
- [26] 国土交通省,『国土交通省マスタープランについて』, <https://www.mlit.go.jp/crd/daisei/tsukuba/data/001.html>,2021/12/17 閲覧
- [27] 国土交通省,『筑波研究学園都市』, <https://www.mlit.go.jp/crd/daisei/tsukuba/index.html>,2021/12/17 閲覧
- [28] 国立環境研究所,『筑波研究学園都市の景観変化の記録(1980、1991、2006、2021)』, <https://www.nies.go.jp/social/keikan/index.html>,2021/12/17 閲覧
- [29] つくばハウジング研究会,『筑波研究学園都市 年表』, <https://www.tsukuba-housing.org/thistory/nenpyo/nenpyo.pdf>,2021/12/17 閲覧
- [30] YouTube,『ACCS スペシャル 昭和 41 年～47 年頃のつくば』, <https://www.youtube.com/watch?v=c6yG5jYEx9g>,2021/12/17 閲覧
- [31] YouTube,『ACCS アーカイブ(研究学園都市今昔 25 年)』, <https://www.youtube.com/watch?v=1QIDiH7xhcg&t=293s>,2021/12/17 閲覧
- [32] YouTube,『茨城県映画『EXPO'85 科学の祭典』(1985 年(昭和 60 年度)制作) つくば科学万博 '85』, <https://www.youtube.com/watch?v=4Ixx9s2iDr0>,2021/12/17 閲覧
- [33] YouTube,『ACCS アーカイブ(研究・学園都市を作る)』, <https://www.youtube.com/watch?v=r7rsQyGQVyc>,2021/12/17 閲覧
- [34] YouTube,『茨城県映画『未来をひらく都市ー筑波研究学園都市ー』(1981 年(昭和 56 年度)制作) ▼』, <https://www.youtube.com/watch?v=H8GEAPcXHVY>,2021/12/17 閲覧
- [35] YouTube,『北条とつくば道 郷愁の 1980 年代の町なみ 1』, https://www.youtube.com/watch?v=jOjTD7J1_4c,2021/12/17 閲覧
- [36] 津島軽便堂写真館,『筑波鉄道+ケーブルカー』, <http://tsushima-keibendo.a.la9.jp/tsukuba/tsukuba.html>,2021/12/17 閲覧
- [37] red50kei ローカル私鉄と国鉄,『筑波鉄道 廃線後 比較写真』, <https://red50kei.skr.jp/tukuba/tukuba-hosoku.html>,2021/12/17 閲覧
- [38] 桜井 武雄,『茨城県下の田園都市運動について』, https://www.jstage.jst.go.jp/article/arp1982/6/2/6_2_42/_article/-char/ja/,2021/12/17 閲覧
- [39] 長島 弘道,『農村の生活環境整備と集落——茨城県における田園都市建設事業を事例として——』, https://kokushikan.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6907&item_no=1&page_id=13&block_id=21,2021/12/17 閲覧
- [40] 住宅生産振興財団,『家とまちなみ』『まちなみ図譜・文献追遙其ノ七 『田園都市』』,2007,56 巻 p66-71
- [41] 村上曉信,『明治期の内務省地方局におけるハワード"Garden City"論の受容に関する研究』,1999,農村計画論文集 18 巻 p13-18
- [42] ル・コルビュジェ著,吉岡隆正訳,『建築をめざして 第 14 版』,鹿島出版会,1979

付録 筑波研究学園都市関連年表

年	月	出来事
1961	9	研究学園都市の建設を閣議決定
1962	5	移転候補地の調査開始
1963	9	つくばに研究学園都市の建設が閣議決定
1964～ 1965		茎崎村で反対運動
1966	3	土地の調査など終了
	7～8	土地の買収など
1967	6	用途地域が指定され、都市計画の決定
	9	移転を予定する機関として 36 機関を決定
1968	5	研究・学園都市の土地利用について決定
1969		新住宅市街地開発事業着工
1970	5	「筑波研究学園都市建設法」制定
	6	常磐自動車道整備計画決定
1971	2	「筑波研究学園都市建設計画の大綱」「筑波研究学園都市公共公益事業等の整備計画の概要」を推進本部決定
	3	用地買収がほぼ終了
1972	1	竹園地区の公務員宿舎に入居開始
	3	下水道の都市計画決定、移転 1 号（無機材料研究所）の業務開始
	4	ごみ焼却場の都市計画決定
1973	3	建設計画標準決定
	4	昭和 50 年度（1975 年）末を目途に移転機関等の移転を行うことが決定
	10	筑波大学開学
1974	4	学園地区初の学校開校
	6	建設法関係改正施行
1975	3	昭和 54 年度を目途に移転機関等を移転することに変更
1976	10	筑波大学附属病院の開業
1977	1	学園東大通り線全面開通
1979	4	学園地区初の高校（竹園高校）開校
1980	3	洞峰公園完成
	3	当初予定された 43 機関の移転が完了（研究学園地区の概成）
	6	筑波科学博候補地の地権者会議開催
	6	科学博候補地買収契約開始
	6	つくばセンタービルの建設に着手

	9	移転・新設する研究・教育機関等を2機関追加
	9	国土庁「研究学園地区建設計画」決定
	11	「筑波研究学園都市市街地開発事業の概要」が谷田部、筑波・大穂地区に提示される
1981	4	常磐道 柏-谷田部間開通
	8	「周辺開発地区整備計画」承認
1982	7	東光台研究団地完成（民間研究機関等の進出開始）
	9	移転・新設する研究・教育機関等を1機関追加
1983	6	つくばセンタービルとノバホール完成
1985	1	常磐道が東京と直結
	3	つくばエキスポセンター、ショッピングセンター「クレオ」開館
	3～9	筑波科学万博の開催
1986		周辺開発地区の工業団地の整備に着手
1987	1	移転・新設する研究・教育機関等を1機関追加
	11	つくば市発足（三町一村）
1988	1	筑波町がつくば市に編入
	9	筑波研究学園都市建設25周年記念式典開催
1989	5	国土庁「新つくば計画」
1990	6	つくば文化会館アルス開館
1991	10	常磐新線（つくばエクスプレス）の整備に関する基本計画を国が承認
1993	2	土浦・つくば・牛久業務核都市基本構想承認
1994	10	常磐新線（つくばエクスプレス）起工
1995	11	科学技術基本法の制定公布（国や自治体が科学技術の振興を支援）
1996	7	市民交流センター（カピオ）開館
	7	第1期科学技術基本計画
1997	3	つくば国際会議場（エポカルつくば）着工
	11	「今後の筑波研究学園都市の整備に関する研究委員会」提言
1998	4	国土庁「研究学園地区建設計画」と茨城県「周辺開発地区整備計画」の改定
1999	3	法定事業（新住宅市街地開発、一団地の官公庁施設、都市公園、区画整理）終了
	6	つくば国際会議場（エポカルつくば）開館
		つくばエクスプレス沿線開発都市計画決定
2001		第2期科学技術基本計画
2002	4	福祉循環バス開業
	11	荃崎町がつくば市に編入
2003	9	コミュニティバス開業
2004	6	筑波研究学園都市交流協議会が発足

	7	筑波研究学園都市移転機関等の移転計画の概要変更
2005	8	つくばエクスプレス開業
2006	3	圏央道つくば牛久ー阿見東開業
	3	第3期科学技術基本計画
2007	10	イーアスつくば開業
2008	3	イオンモールつくば開業